

沖縄糸数アブチラガマ専属ガイドと入壕者の〈やりとり〉に着目した平和教育の再検証

—壕内で専属ガイドは何を伝え何を語らないのか—

中原 葵

本研究では、糸数アブチラガマ専属ガイドを対象に、半構造化インタビュー調査を通して、戦争非体験者が戦争非体験者に沖縄戦の様相について何をどのように語るのか、考察した。

糸数アブチラガマは沖縄本島南部の南城市玉城字糸数にある自然洞窟(ガマ)である。沖縄戦時、もともとは糸数集落の避難指定壕だったが、1944年7月頃から日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となった。軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、全長270mのガマ内は600人以上の負傷兵で埋め尽くされた。1945年5月25日の南部撤退命令により病院が撤退したあとは、糸数の住民と歩けない負傷兵、日本兵の雑居状態となる。その後、米軍の攻撃に遭いながらもガマの中にいた人々は生き残り、8月22日の米軍の投降勧告に従って、住民と負傷兵はガマを出た。

現在、年間10万人が見学を訪れており、そのほとんどが修学旅行生である。糸数アブチラガマ専属ガイド(以下専属ガイド)の前身団体のゆうなの会は2009年に設立され、沖縄戦のガマの実相から「命の大切さを伝える」ということを理念に活動を行ってきた。現在は南城市と個人契約と形を変えて、ガイド活動を行っている。

2009年2010年にかけて専属ガイドは私語をやめず、騒いだりふざけたりする生徒達への対応に手を焼いたという。しかし、現在では当時とは異なった対応をしており、「騒ぐ生徒」たちがいたとしても彼らの興味を引き出し、説明を行っている。

「騒ぐ生徒」は①暗闇への恐怖(二次受傷への防衛反応)②ただ思ったことが口から出てしまう③いじめや虐待等の生きづらさを感じて情操的土台が形成されていない、のいずれかの理由で私語をしてしまう。専属ガイドは暗闇への恐怖を和らげるために配慮したり、入壕者の怖いという感情や思わず口から零れた感想を元に語りを始めたりすることで、「騒ぐ生徒」に対応して案内を行っている

る。

また、情操的土台が形成されていないため、戦争について関心がもてない生徒に対しては、熱心に語るだけでは、修学旅行生に届かないのかもしれない。しかし、特に「命の大切さ」や平和を伝えなければならない相手は、生きづらさを抱えて情操的土台が形成されていない彼らである。

吉田(2018)は、現在、沖縄の平和学習は「沖縄戦を学ぶ」ではなく「沖縄戦から学ぶ」という目的の転換期にあると述べている。本稿で対象とした糸数アブチラガマ専属ガイドも沖縄戦から「命の大切さ」を学ぶことを重視している。入壕者が生きづらさを抱え、情操的な土台が形成されていない場合でも、専属ガイドは対話的教育を実践することで、ガマの実相と「命の大切さ」を伝えようと取り組んでいる。生きづらさを抱える人に、沖縄戦を通して「命の大切さ」を伝えるということは、積極的平和実現のアプローチにもなっている。

「命の大切さを伝える」こと以外にも、「政治的なことは話さない」という理念の下、専属ガイドは戦争体験継承活動を行っている。これは、平和教育において一般的にいわれる政治的規制・自主規制とは異なるものである。当時の様子が残されたガマ(現代の生活では経験し得ない暗闇かつ、人の死が関係しているセンシティブな場所)で、証言を基に案内するガイドは聴き手に対して大きな影響力を持っている。ただ一つの正解を求めてしまう傾向がある修学旅行生に対しては、「偏った」説明をした場合、専属ガイドの考えが「正解」であると捉えられかねない。専属ガイドの意見が正解であると修学旅行生が認識しないように配慮して、立場が分かれている事象の詳細な説明に時間を割くことよりも、ガマの実相を伝えることを優先している。

本稿では、専属ガイドに着目して研究を行った。「騒ぐ生徒」自身が専属ガイドの案内・語りをどう受け止めたのかについては検証していない。案内を受ける側の入壕者・修学旅行生が、専属ガイドの説明内容や案内全般をどう受け止めたのかについては検討する必要があると考えられる。